釣れ釣れなるままに

２０１０年思い出の釣行記 PART.　４

奇跡そのもの

鹿島釣狂

☆釣 行 日　　平成２２年７月６（火）
☆入釣場所　　留萌三泊・湯泊岬
☆釣　　果　　マイカ　２７杯

マイカ釣り

劇作家の井上ひさし氏が亡くなったが、彼は「きらめく星座」の中で「人間は奇跡そのもの」「宇宙に地球のような水惑星があること自体が奇跡」と述べている。井上氏がいうように、その地球に生まれた小さな生命が数限りない試練を得て人間にまで至ったのも奇跡である。そしてその奇跡が積み重なった結果である私や息子が今ここにいる。いくつもの命がつながって自分や家族がいる不思議に思いをはせながら、今日もその命を育んできた母なる大海原へと向かった。

雄冬の海岸でマイカが釣れる季節になった。息子を誘うとホッケ釣りは飽きたが、イカなら釣ってみたい気もすると宣う。息子にはもちろんイカ釣りの経験はない。留萌周辺でマメイカ爆釣という記事もあり、釣具店で豆イカ用に「イカ名人ＤＳ１．８号Ｇ日本海オレンジエビ」と「ナオリー・レンジハンター１．８Ｓ・ＣＫＣＦクリア夜光チカ」を、マイカ用に水中ライト、エサ巻テーラやエサのカツオを購入した。

岩見沢以北は高速料金が社会実験と称して６月２８日から無料になったこともあり、まずは留萌三泊港に立ち寄ってみる。岸壁では所狭しと釣り人が並びエギでマメイカを狙っ

ている。女性や子どもまでもが気軽に楽しんでいる風で、ポツンポツンと豆イカがヒットしているようである。エギでの釣りは初めてだったこともあり、しばらく様子を観察してから１時間ほど真似事を続けたてみたが、勝手が分からずに豆イカを手にすることは出来なかった。

午後４時に雄冬に向かった。途中、少し夕食には早いが、増毛の麺屋田中商店酒造ラーメンに立ち寄った。酒粕のきいたラーメンが前評判通りでとても美味しかった。

午後５時、雄冬の岩場に着いた。出岬への下り口でいつも利用させて頂いていた木製のハシゴがアルミ製に替わっていた。釣り人個人ではとうてい出来るものではなく、おそらく漁師が荷上げ用に使っているものであろう。今回も有り難く使わせて頂く。岩場の先端で夕暮れに向かって仕掛を準備しているとエサ切りバサミを忘れたことに気がついた。息子に雄冬の街まで買いに行かせる。しかし、雄冬では店が開いておらず、結局浜益まで行ってようやく見つけたとのこと。これが復路のガソリンを心配する原因となった。

午後７時半に釣りを開始する。２号の磯竿に水中ライトをつけてその先にテーラを結んだ。水中ライトに息子は実績のある緑点滅を使わせた。私は青や赤、そして最近出てきたレインボーを取っ替え引っ替え試してみた。潮は石狩方面から留萌方面へと緩やかに流れるイカ釣りにはもってこいの状況である。

午後８時、遠投していた息子のケミホタル７５ロングレギュラーを付けたウキ「北海円錐」が海中にキラキラと沈んでいった。合わせのタイミングからリールを巻く速度、竿の操りまでをも次々と指示を出す。息子が手にしたのは胴長２０㎝程のこの時期としてはまあまあのサイズである。イカの表面にポワッ、ポワッと浮き出た虹色の文様が色を変えながら移動していく。その姿についつい見とれてしまう。

順調に釣れ続いていたが、息子が足が痛いと訴える。２８㎝の長靴が窮屈で親指の先が痛いと言うのだ。時は１０時半で、まだまだ釣れる気配は濃厚だったが仕方がないので釣りを終える。クーラーから出して数えてみると２７杯だった。

帰りの道中、ガソリンの残量が心配になる。浜益から厚田経由で岩見沢までは持たないかもしれないと滝川経由で岩見沢に向かった。そしてとうとう青山トンネル前でランプが点滅し警告音が鳴り始めてしまった。息子の車はハイブリットで名高いプリウスなので、あと１００㎞ぐらいは走れるのだろうか。それにしても警告音が鳴りっぱなしだと不安はつのる。滝川で開いているガソリンスタンドは見あたらず、ようやく砂川北光の出光石油が開いており安堵の胸をなで下ろす。我が家について早速、イカを捌いてビールでカンパーイ！

イカ釣りの前にソイ釣りを試みるもアタリは出ない。

息子、初イカゲット。グリーンの発光体が目印となりアタリがとりやすかった。

☆釣 行 日　　平成２２年７月１８日（日）１９日（月）
☆入釣場所　　白里谷・エンルム岬
☆釣　　果　　アブラコ　　３００　㎜　　５
　　カジカ　　４７２　㎜　　１

エンルムのカジカ

１週間後に控えた第４回大会の下見のために、島氏と共に日高海岸を彷徨く。第４回大会は７月下旬の大会で夏枯れに向かう時期でもあるので、近年審査に出されるようになったタカノハをも視野に入れながらの下見である。「北海道のつり（０９年１１月号)」川村清隆氏の記事に“全道大会出場を目指した予選会でケリマイに３名で入釣！！５５㎝、５０．５㎝を頭に３名で１０枚のタカノハ”とあった。掲載写真にあった釣り場を確認したくて旧三石温泉裏に立ち寄ってみたが、掲載写真とは様子が違っている。帰りにもう一度確認することにして先へと進んだ。

昨年７月の大会で吉井　博氏が大釣りして優勝したエンルム岬の磯を観察する。丁度干潮時間帯だったので岬先端まで足を伸ばしてみると、櫛の歯状に切れ込んだ溝の状況が手に取るように分かった。

さらに、「北海道のつり（０８年７月号)」佐々木和之氏の記事“三年越しのタカノハ”で紹介された白里谷で車を止めて磯の状況を確認する。東平宇にかけての海岸線は海藻が生い茂り、アブラコやカジカも有望とみた。

旭漁港で遅い昼食をとり休憩した。島氏はここでカンカイでも狙ってみようかと言い出す。カンカイなどは大会に関係ないと思うのだが、周辺の岩場でアブラコを取り、嫁にカンカイを考えているようだ。漁港中坊先端で２名の釣り人がいたので様子を伺うと、早朝よりカンカイを狙って入ったが、いまだ獲物はなしとのことだ。それを聞いた島氏はカンカイ釣りを断念した。

東平宇に戻って竿を出してみる。私は荷揚げ階段上、島氏は路肩から遠投中心に狙うが、釣れるのはハゴトコのみ。次に白里谷バス停右にある荷揚げ階段に移動して、防潮堤上から打つもやはりハゴトコのみでタカノハの気配を全く感じることはなかった。

２時間ほどで切り上げ、幌満、ルランベツ、コトニ、エンルム岬裏、ソビラ岩の海況を見学してから遅い夕食をとった。午後１０時、エンルム岬付け根で仮眠をとる。島氏は防波堤を歩きながらソイを狙ったがドンコ２匹しか相手にしてくれなかった。その代わりと言っては何だが、ヤブ蚊の猛襲に遭い、足も腕も赤く腫らして帰ってきた。

日付が変わってエンルム岬の潮が引いたので、二人で溝を移動しながら竿を出した。しかし、小型のアブラコは結構釣れるのだが大型がいない。めぼしい釣果といえるのはカジカ４７．２㎝だけだった。

潮がすっかり引いたエンルム岬右平盤

カジカ４７．２㎝

岩見沢釣遊会第４回大会

☆開 催 日	平成２２年７月２５日			
☆開催場所	様似港～襟裳港			
☆入釣場所	白里谷			
☆釣　　果	アカハラ	３８４	㎜	４
	ハゴトコ	２７１	㎜	１
	重量	２２６	０ｇ	
☆成　　績	合計点数	８８１	点	
	成績	４	位	

一発狙い

下見でエンルム岬は魚が薄いと感じて、今回は１発タカノハを狙って白里谷で竿を出すことにする。昆布根は試し釣りしていなかったが某かのものは出るだろう。

５、６人が始点の様似港に入り、電工前、門別橋を過ぎた。シイチカップ川に架かる白里谷橋でバスから降ろしてもらう。防潮堤から砂浜を見ると下りるのは危険な高さである。川に沿って白里谷橋の下をくぐり抜けて行こうと様子を見るが、川縁は護岸が施されていて高さがありこれも難しそうだ。もう一度防潮堤をよく見るとアルミのハシゴが砂浜に向けて立てかけてあったのでそれを利用させて頂いて河口に出た。シイチカップ川の流れは砂に吸収されてほとんど小川だ。

まずはアカハラを狙ってゴロ天秤仕掛を近投する。何が出るか分からないのでゴロネット仕掛を中投する。そしてタカノハ仕掛を遠投する。早速、近投で３０㎝ほどのアカハラがパタパタと続いた。しばらくこんなのが続くのだろうと思っていると、中投でタカノハが来た。やっぱりタカノハはいるのだ。３０㎝に満たない小物だがハリを喉の奥まで飲み込んでしまっている。無理矢理ハリを引っ張り出すよりハリスを切って放流した方が生存率は高まると聞いているのでそうしてみる。その後も、アカハラに混じって小物のタカノハが釣れ続いた。口先にかかっているものはすぐにリリース出来るのだが、２匹に１匹は飲み込まれているのが忍びない。アカハラは４０㎝弱のものがぽつんぽつんと上がってくるのだが、タカノハは規定の３５㎝を超えるものは出ない。

じっとりと体にまとわりついていた霧雨が大粒の雨に変わった。荷物を濡らさないようにと気を遣う。砂浜だと竿やリールにも砂が入り込んで手に負えなくなるのだ。舟揚場で釣りをしていた御仁が様子を伺いにやってきた。水鱗会の朝倉得博氏である。彼も一発タカノハ狙いで白里谷に入ったが、いまだに釣りものがないらしい。ハゴトコも釣れないという。私は３５㎝以上のアカハラが４本そろったので、竿３本とも遠投にして広範囲を探ることにする。打ち返していればいつかは大物タカノハが出るだろうという淡い期待を抱きながら・・・。

まだ５時前なのだが昆布取りの船が岩礁地帯に集結してきた。そしてサイレンの合図とともに海岸縁で作業を始めた。今年は海が冷たくて昆布は深いところのものがまだ育ちきっていなくて浅場のものを採っているということだ。私も移動することにする。昆布根にはアブラコやカジカがいるように思えたのだ。これからでもアブラコ４本にカジカ１本を目標にして頑張ることにした。

東平宇に向かう途中で朝倉氏の様子を伺うと、タカノハがようやく来たという。彼のバッカンを覗かせていただくと５０㎝に届こうとするタカノハが収まっていた。タカノハの大物はやはりいたのだ。最後まで粘りきれない自分に嫌気がさす。タカノハ狙いで白里谷に入ったはずが、見込みがないとみるやあっさりとアブラコ狙いに切り替えたのだ。どこかに無難な所を狙って行動する自分がいる。たとえタカノハが釣れなくても、諦めずに最後まで粘ったことをよしとしなければ、いつまでも自分の性格を変えることが出来ないだ

ろう。

それでも一旦行動に移し始めていたので後に引き返すわけにはいかない。後ろ髪を引かれながら先を目指す。重い足取りでキャスターを引っ張っているとゴトンと音がしてキャスターが傾いた。いやな予感がして振り返ってみるとキャスターの車輪が外れている。車輪を止める車軸の金具が錆びて用を足さなくなっていたのだ。ああどうしよう。車輪を車軸に収めて金具を蹴飛ばしてみる。何とか車輪が収まって応急手当は出来たようだ。持ちこたえてくれればよいのだが・・・。

防潮堤の縁には昆布巻き上げ機を搭載した軽トラが並び、とったばかりの昆布を束にして巻き上げている。満潮時は姿を隠していた平盤の横に昆布を満載にした磯舟がいる。軽トラの上に乗って作業をしていたご老人が声をかけてくれたので、邪魔にならないかを聞いてみると、影響はないという。「なんぼでも釣ってかまわないぞ」とおっしゃるが・・・。

満潮時から干潮に向かう海岸線（下見時）　干潮時に出る平盤に乗ってはみたが・・・

クーラーを用意したが

喜び勇んで平盤を渡っていくと意外に浅く簡単に渡ることができた。しかし、ここではハゴトコのみが竿を揺らしただけである。またまた、移動することにして、三脚を支えていた水バケツを空けた。それとともにそのバケツの中で生かしておいた大きめのハゴトコをもぶちまけてしまった。この後何も釣れなければ嫁になるハゴトコである。３０センチほどが青草の上できょとんとしていたが、手を伸ばすと青草の中に潜り込んでしまった。穴は意外に深くてそのハゴトコは命拾いした格好となった。

潮が引いたので更に右方向に移動した。両端の根が沖に張りだし、中央が開けた感じになっている。しかし、ここは根掛かりがやたらと多い。中投は全て根掛かりしてしまう。遠投は何とか抜けてくるのだが、途中のはえ根にこれまた仕掛けを取られてしまう。

締め切り間際になって、グン、グン、グーンとよいアタリが出た。大きく竿をあおると魚がのった。アブラコ独特のいい感触である。根に潜られないようにと懸命にリールを巻くが、これも途中の根に引っかかってしまった。ぐっと堪えて待つしかない。太平洋の昆布根はここでじっと耐えているとアブラコが動いて昆布根から出てくるのだが、今度ばか

りは勝手が違った。道糸を少しゆるめてみるとそれに合わせてぐいぐいと引っ張る大魚がいるがやはり抜け出てこない。何とか抜けてくるようにと祈りを込めて再度強く引っ張った。しかし、張り詰めていた道糸がフワッと軽くなって手元に戻ってきた。痛恨の高切れである。結局、白里谷ではタカノハどころかアブラコもカジカも手にすることは出来なかった。

審査結果

優　　勝	前野達志	１３９２点	(アブラコ490㎜+カジカ　338㎜+5640g)	こ と に
準 優 勝	嵐　光博	１２８１点	(アブラコ465㎜+カジカ　318㎜+4980g)	旭
３　　位	島　強二	１０８０点	(アブラコ458㎜+アカハラ304㎜+3180g)	下 近 浦
４　　位	鹿島釣狂	８８１点	(アカハラ384㎜+アブラコ271㎜+2260g)	白 里 谷
５　　位	堀内正博	８６３点	(アカハラ384㎜+カジカ　343㎜+1360g)	様　似
身長優勝	西川紘一	１３６１点	(アブラコ485㎜+アカハラ400㎜+4760g)	こ と に

今回はクーラーに氷とビールを詰めて持って行った。暑い夏の盛りなので釣ったタカノハを刺身にしていただこうとクーラーを持参したのだ。帰りのバスに乗り込んでのビールはさすがに美味しかったが、そのクーラーに詰め込むはずだったタカノハがない。

仕方なく、現地で調達したアカハラの頭と内臓をとってクーラーにしまい込んだ。次回大会のエサとなるアカハラだがどれだけ生きのいいものにすれば気が済むというのだろう。

今回は女房にタカノハの刺身を食べてもらって次回の大会参加を快く見送ってもらおうという魂胆だったが叶わなかった。今回はしょげかえって来た私だが、タカノハの刺身は次回に回すことにしよう。

左から準優勝：嵐、優勝：前野、身長優勝：西川